

竹村俊郎作品集

上

詩・短歌・俳句

竹村俊郎作品集

上

詩・短歌・俳句

室生朝子編

文化総合出版

竹村俊郎作品集 上 全三巻 六〇〇〇円

発行日 ©昭和五十年九月十五日

著者 竹村俊郎

編者 室生朝子

発行者 田中 亨

発行所 株式会社 文化総合出版

東京都文京区本郷二丁目二

お茶の水ビル(〒112-113)

0093-75017-7436

信毎書籍印刷／宮田製本

凡 例

- 一、この巻には、詩、短歌、俳句を収録した。
- 二、詩篇の配列は、詩集、雑誌、未発表の順とした。
- ① 詩集については、刊行年代順に配列した。
- ② 雑誌掲載詩篇については、まず主な掲載誌ごとに、次いで散発的な掲載誌を一つにまとめ、いずれも刊行年代順に配列した。掲載誌名、年月等が不明のもの、および新聞掲載のものは、「掲載誌不詳」として最後に置き、配列は推定年代順とした。なお、詩集と重複している雑誌掲載詩は、一部をのぞきこれを省いた。
- ③ 未発表詩篇の中からは、著者が詩集刊行の意図をもってまとめていた「北国人」と、組詩「麗夜」を収録した。頁数の関係で多くの作品を割愛せざるを得なかったことを付記しておく。
- 一、短歌は『ARS』に発表されたものを、年代順に収録した。
- 一、俳句は『鶴』『風流陣』発表のもの全部と、「発句研究ノート」より、年代順に抜粋収録した。
- 一、本文はすべて原本、原文通りとした。ただし、明らかな誤植、誤記と考えられるものは訂正したが、なおかつ誤植と誤認される恐れのあるものは、(ママ)と傍記、または「」内に補った。
- 一、著者が発表後、加筆、削除、改変を行なっている箇所には*印を付し、巻末に「編注」としてその異同を示した。なお、著者の書き込みが多く、一々その箇所を示し得ない場合には、題名に*印を付し、その内容の一部または全部を「編注」に掲げた。
- 一、漢字は原則として新字体を用い、送り仮名、仮名遣い、振り仮名、傍点等は原文通りとした。ただし、仮名遣い等、一部不統一な点が見られるものは、適宜統一を行なった。

目 次

葦茂る

この詩集の読者のために 萩原朔太郎……三
 自序……………九
 陽炎……………三

放浪息子と波……三 盗人……三 鏡……三
 三 雪にたつ陽炎……三 しののめに
 ちかく……三 竹の葉の鳴る……二四 蛙
 ……二四 敵……二五 白い道路……二五

苔の上……………二六

はんもつく……二六 蔭影……二六 苔の上
 ……二七 盲目のみちづれ……二八

孤独……………二九

壁に攀づる……二九 家をたつる……三〇
 不思議な花……三〇 蟋蟀……三〇 目ざめ
 ……三 梢……三 森と林……三 孤独……
 三 ある日……三 葱……三 ある夜……
 三 娘……二四 渦……二四 信仰……二四

木の葉の欣び……………二五

暗い林……二五 はげしく光る……二六 空
 ……二七 木の葉の欣び……二六 古鏝びた
 寝台……二六 葦茂る……二六 木の根……
 車窓……三 室隅……三 黒い森……三
 冬……三

十二月

序……………二七

玉馬……………二七

自画像……二七 詩は……二七 再び詩は……
 ……二七 独坐……二七 君！……二七 坂……二七
 街頭の星……二七 君は言ふ——不幸な彼
 を愛せよと……二七 飛行機……二七 偶感
 ……二七 秋……二七

沙漠の笛……………二七

帰り去る……二七 曇日……二七 流転……二七
 花の詩……二七 或風景……二七 壑穴……二七

揺るる鐘…哭 或乞食の詩…哭 阿
房…哭 若き女の死…哭 書かねば
ならない…哭 嗟嘆…哭 僕第一…
哭 僕第二…哭 朝…哭

甲板……………吾

月光…吾 亜麻色髪…吾 ある夜…
吾 風と戯るる…吾 ろーりんぐび
つちんぐ…吾 なだれ…吾 快活…
吾 清涼剤…吾 無題…吾 戦利品
吾 上陸…吾 土耳其の国旗…吾

白樺……………毛

日曜…毛 市街…毛 冬の街…吾
荷船…吾 パスの屋根…吾 都会の
核…吾 孤独…吾

黒き樹……………六

種族…六 みごもる貝…六 山椒魚
…六 散策者…六 北国人…六 鬱
金香…六 白眼…六 月明…六 偶
成…六 白百合…六 縹…六 額…六

鴉の歌

鴉の歌……………三

黒い魍…三 裏切られ…三 暗い酒
…三 牡丹雪…六 盃のみが明く…
六 どうなることやら…三 暗き地
平…三

冬の燈……………毛

枯木の中…毛 枯木かげ…毛 冬の
燈…毛 或日…毛 隣家…毛 風の
伴奏…毛 龍…六 紅棧…六

旅人

序……………室生犀星…六

行雲……………六

陋巷哀歌…六 火…毛 芒…六 き
りぎりす…六 あがき…六 虫…六

山中歌…七 山びと…七 断片…七

離騷……………七

ウゴリノ…七 オルゴル…七 消息

…七 荒涼…七 自笑…七 青衣…

…七 哀歌…七 故里の歌…七 眺望

…七

後記……………一〇

匏 草

序……………一〇

匏 草……………二〇

宿命…二〇 流転…二〇 山に雲…二

み山…二 木枯…二 悲風…二

鬼…二 寂寞…二 羽州むら山里

の歌…二 蜜柑…二 ひとり言…

二 一本の栗…二 馬鈴薯の花…

二 偶成…二 離居…二 悲歌…

二 征くか丈夫…二 曇日…二

山ずみ…二 夏日…二 石仏…二

松籟…三 踰踰…三 打水…三

展墓…三 自戒…三 この山かげ

…三 冬の山…三 冬の水…三

群山真洞…三 曠野の子…三 火

…三 初日…三 豚…三 老醜…

…三 挽歌…三 春來…三 戦死…

…三 丈夫…三 三千年の血

…三

匏草以前……………三

家をたつる…三 蟋蟀…三 目ざ

め…三 私はめぐる…三 孤独…

…三 ある日…三 ある夜…三

葦茂る…三 雪の夕べ…三 冬…

…三 一つの貝…三 荷船…三

五月のバス…三 蕭条…三 月光

…三 甲板抄…三 君…三 坂…

…三 街頭の星…三 秋…三 痛恨

…三 愚人の告白…三 牡丹雪…

…三 盃のみが明く…三 漂泊者が

歌へるたそがれの歌…三 日暮の

街…三 天鵝絨の乳母…三 笑…

雑誌収録詩篇

一四 愚父……一四 災……一四 枯木中……
 一四 枯木かげ……一四 冬の燈……一四
 或日……一四 隣家……一四 風の伴奏……
 一四 龍……一四 紅棧……一四 三時……
 一四 部屋……一四 轆轤……一四 蓼虫……
 一四 陋巷哀歌抄……一四 芒……一四
 さりぎりす……一四 断片……一四 自笑……
 ……一四 青衣……一四 哀歌……一四

『感情』掲載詩篇……………一六

ぼんやりする眼……一六 軽い感冒……
 一六 夜景……一六 与へられたる椅子……
 ……一六 春をのぞけば……一六 忌はし
 い唄声……一六 路上……一六 交叉する
 線……一六 疲労……一六 冒瀆……一六
 抒情詩集のはじめに……一六 午後……
 一六 秋日思慕……一六 五本の指……一六
 とぐろまく蛇……一六 女に贈りたる
 詩……一六 臥床して魚を追ふ……一六

『パンテオン』掲載詩篇……………一四

標に立ちて……一四 寂しい歓喜……一四
 寒夜の月……一四 別離……一四 敷石道……
 ……一四 水と女……一四 めすつとかん
 かく……一四 百姓どもへの声……一四
 たまたま感すること……一四 浜の陽
 炎……一四 酒造場の裏道……一四 春立
 ち……一四 春夜の点滴……一四 短詩春……
 ……一四 短詩売女におくる……一四 な
 にが来るのだ……一四 喫茶店の一隅
 にて……一四 憂鬱の遠み……一四 建つ
 る丸太小屋……一四 見知らぬ嶋……一四
 轢死……一四 窓……一四 壁……一四 一日……
 ……一四 悄愴……一四 暗い……一四 恐
 ろしい……一四 黄昏時の幻想……一四
 雪……一四 美しき食器……一四 暗い街
 路……一四

『パンテオン』掲載詩篇……………一四
 無題……一四 無題……一四 喜劇俳優……
 一四 亀井戸……一四 峽間の月……一四
 再び詩は……一四

『詩神』掲載詩篇……………二〇〇

訣別……………鴉……………動物園の琴……………

二〇一 闇……………二〇一

『四季』掲載詩篇……………二〇三

帰郷断章……………谿間……………熱砂へ……………

……………神……………老鴉……………朔風に……………

寄する……………若き日……………深山鴉……………

……………天命……………いざ斧入れむ……………

二〇二 沫雪……………独歌へる……………

諸誌掲載詩篇……………二二三

散文詩二篇……………夜路……………絶望……………

の巷……………黒馬……………傀儡……………

山中微吟……………思想の虎……………戦……………

争・平和……………むら山少女……………

村の少女……………捧げまつらむ……………

あの森林伐らむ……………

掲載誌不詳詩篇……………二二五

ギッシングの秋……………天の瓦解其一……………

……………天の瓦解其二……………貧乏な……………

る人生……………朗らかなる空想……………

痛恨……………ああ遂に……………或詩集……………

の序……………或とき……………たそがれ……………

……………昨日の声……………里の賑……………

国民学校……………乏しさあらめや……………

蛙鼓……………愚にあらむ……………析……………

……………鴉……………米供出……………仕へ奉……………

る……………

未発表詩篇

詩集「北国人」原稿……………二四二

村人……………虫の音……………矮人……………

地獄の花……………匂……………胡蝶……………

異園其の二……………無題……………魚……………

二四五

朧 夜……………二四六

一対話……………二蒼明の砂漠……………

三嗟嘆……………二四七

短歌	……………	二五
----	-------	----

俳句

『鶴』掲載句	……………	二七
『風流陣』掲載句	……………	二七
発句研究ノ一ト	昭和八年七月	二八
発句研究ノ一ト	其之二	二六
発句研究ノ一ト	其之三	二七
発句研究ノ一ト	其之四	二七
発句研究ノ一ト	其之五	二八

編注	……………	二七
----	-------	----

口絵写真・千葉春雄

葦
茂
る

この詩集の読者のために

——序に代へて——

叙情詩の創造する世界は、散文の恠致の上に建てられたものでなければならぬ。詩は現実の写象でない。「自然そのまま」「生活そのまま」の実感は、むしろ我等に於て恠致のないもの、未だ美の範疇に入らないものである。何となれば、詩の人生に於ける意義は、人間の生活を、その有るがままの現実に於て再現反映するものでなくして、寧ろ之れに「感情の炬火」を投じ、生活をして真に意義ある生活たらしめ、自然をして恠致ある自然たらしめるもの、言はば人生に規範と理想とをあたへる所にあるからである。——詩は生活の太陽である。独逸の民諺。——

人間の生活に於ける全ての「力」と全ての「光」とは叙情詩の情緒から流出する。然も詩の本義は、そのエネルギーにあつて、その物質の物理的方則にない。言ひ代へれば、詩の良心は美といふ一つの感情恠致にあつて、現実の実相そのものの概念にあるのではない。詩は人を興奮させ、人を魅惑させ、以てその生活に新しい希望と勢力とを呼び起し、眠れる者の良心に、真理と善美との刺戟をあたへれば足る。そこに「実生活らしき実生活の反映」が描かれてあるかどうかといふやうなことは、詩の批判に於て問題にならない。詩は「人生の実景」を説明するものでなくして、「意義ある人生」「規範としての生活」を暗示するものであるからである。之れ詩の批判に於て、実感（現実的感情）を排して趣味（規範的感情）を貴重する由所である。およそ叙情詩をよむほどの人は、先づか

かる自明の常識——詩の本義が美、即ち情緒と称する趣味にあつて、無価致倦怠な現実的実感にないといふ常識——を把持せねばならぬ。

竹村俊郎氏の詩篇は、自分にとつて最も親しいものである。竹村君の生活には、純一な人間の張りつめた苦痛がある。

彼の詩の言葉は、常にこの純一な祈禱から生れてゐる。自分が彼の詩をよむとき、いつも心に深く感ずるものは、「至純なる靈の哀傷」といふ言葉である。あまりに至純なる心は、あまりに傷み悲しむの心である。思ふにかかる詩人の生活は、靈魂の孤独に生きて、尚且つ靈魂の愛を求めんとする生活であらう。寂しくして高貴なる感情の光がそこにある。

竹村君の情緒は、ある意味に於て、自分の

情緒と接合する。接合するといふ意味は、そこに一つの同じ幹があり、そこに二つの別な枝があるといふ意味である。自分の憂鬱や、自分の祈禱やは、時としてしばしばまた竹村君のリズムにも流れてゐる。この共通の流れを通じて、自分は竹村君を会得することができる。何よりも敬嘆すべきことは、彼の叙情詩にみる「情緒の濃まやかさ」と、その叡智の「鋭どき明かるさ」である。詩人の生命は、言ふ迄もなく、情緒の熱と趣味の智慧（直感能力）とにある。情緒のみあつて趣味がなければ感傷となり、趣味のみあつて情緒がなければ涸燥した概念の詩となつてしまふ。若い処女のやうな情緒に、予言者のやうな智慧をもつ人のみ、始めてよき叙情詩の作家であることができる。そして竹村君は、かうした天分に於て申し分なき詩人である。

ここに孤独な隠匿者の生活がある。彼は静かな冥想を愛する人である。彼の詩篇のすべてを通じて流るるリズムは、静かに音もなく降りつむ雪の陰影である。雪は彼の情緒を語り、影はその智慧を教へる。あまりにも著しいことは、この詩集の作家が、雪にうもれた北国の人であるといふことである。

巨大な雪の陰影と、北国の恐ろしい薄暮とは、不思議にも人の心を神秘的にする。なべての雪国の物語には、一種の怪しげな夢魔がある。北国的浪漫思想は、南国のそれと全く趣味を異にする。北国の鈍い太陽と、その物悲しき余情とは、哲学に、宗教に、文学に、一種の美しき極光オーロラとなつて示現される。そしてかかる不可思議な神秘的感情は、竹村君の詩を通じて、特に著しくふるえわなないて居る。何かそこにある。ノルウェイの童話にみる如き、一種特別の感情——宗教的恐怖をも

てる浪漫情操——の象景がある。

人間の情緒といふものは、今日、心理上に於ける一つの謎である。恋愛の陶醉や、道徳の興奮や、自然に対する恍惚や、宗教の法悦等は、情緒研究に於て、最も普遍的な経験材量である。人は情緒を称して、単に美といひ、趣味と呼ぶのであるが、かかる單純な語法は、未だ情緒の神秘を概念づけるに足りない。何とならば、情緒のリズムは、世の常の感情——実感と称する普通の感情——とは、それ自身全く別のものであつて、言はば人間の靈魂から流出する「神聖なる趣味の陶醉」であるからである。恐らくそこには、到底言葉で以て説明し能はざるリズムがある。一般の叙情詩は、この情緒を以て、愛や、道徳や、正義や、自然やの心象と結びつけるのであるが、ただ特別の詩人は、かかる心象を排

して、純粹無垢の情緒を、それ自身の神経に於て捕捉しようとする。かかる種類の詩——心象なき情緒の詩——を称して、吾人は真の意味での象徴詩と呼ぶ。けだし叙情詩の精髓はここに存するのである。

竹村君の詩篇は、この意味での理想的な象徴詩である。そこには絶対に概念がなく説明がない。ただ「情緒そのもの」があり「捕捉すべからざる心霊の秘密」がある。この心霊の神韻を会得する人にして、始めて象徴詩をよむことができる。それは感じてであり、影であり、香ひである。よき音楽を聴かんとする人は、先づ心に雑念を去り、新鮮な空気の中に、その靈魂の窓を開らかねばならぬ。

ある日

梨の木の手を見ろ

あすこに おまへの青ざめた二つの肺がとまつてゐる

朦朧とよんだこの景色はいつたいどこのなか

蛙は石垣の隙間に眼を閉ぢる

ああ どうしてかうもはげしくからだが痛む

かかる詩篇に現はれた作者の情操は、痛ましきまでに純真な祈禱である。思ふに彼は、彼自身の「隙間に眼を閉ぢる」人である。眼を閉ぢて自我を寂しむ人である。

空は流れる 木立に 壁に流れる

九月の陽はやはらかに 木立に 壁に映る木の葉に攀づる

映る木の葉のかざろひに 流れる季節の影に縋り

私は壁に攀づる